

〈自己家畜化〉の論理から人間関係のあり方を問うⅡ

—言語の視点の位置づけを廻って—

Human Relations, "Self-Domestication" and the Power of Words

穴見 慎一

ANAMI, Shinichi

はじめに

本稿の目的は、類似のタイトルで『総合人間学（第8号）』に寄稿した論文（穴見 2014）において、与えられたテーマと紙幅の関係上語りえなかった議論の背景について、少しだけ自由に記述することにある。その意味において、本小論は、先の拙稿と合わせて読んでいただければ幸いである。

筆者に与えられていたテーマは、上記のメインタイトルにもあるように、〈自己家畜化〉論の立場から人間関係のあり方を論じることであり、さらに、自然と人間の関係性の視点から人間と人間の関係のあり方を論じることであった。また、そうした議論の前提として、第8回研究大会のシンポジウム「人間関係の新しい紡ぎ方—3.11を受けとめて」の議論を踏まえる必要があったことは言うまでもないことである。

先の寄稿論文は、そうした要請に最大限応えようとした試みである。だが、その一方で、触れることができなかつた論点の中には重要なものもある。その一つが、そもそも、〈自己家畜化〉論は、自然と人間の関係性を、道具（「モノ」）を介して理解する人間進化論であり、人間関係のあり方を直接示唆するものではない、という点である。無論、それは、〈自己家畜化〉の論理から人間関係のあり方についての議論を引き出すことができないという意味では

ない。しかし、そこには、決して小さくない隔たりがあり、その距離を超えて十分に論じる為には、両者を媒介する新たな視点と議論が要請される、というのである。

また、同様の問題は、論文における問いの立て方にも当てはまるだろう。先の拙稿（穴見 2014）において、筆者は、3.11以後の「絆」の強調傾向に異議を唱える議論（右傾化、同質化傾向への危惧など）に対し、その指摘の重要性を認めつつも、十分な検討を行わなかつた。そして、むしろ「絆」強調の背後にある「物象化」という現代社会の根本問題に焦点化する問いを立て、議論を展開した⁽¹⁾。無論、それが誤りであった、と言うのではない。ただ、近年、急速に緊張の色あいを増す国際関係にも目を向ければ、現代日本における「絆」強調の背後にあるものを社会経済体制の問題に還元するだけでは不十分であり、むしろ、より直接的には、政治の問題として展開することが要請されてくる⁽²⁾。

そこで、この紙面を借りて上記の存念をほらし、人間関係のあり方の視座としての〈自己家畜化〉論の持つポテンシャルを改めて示したいと思う。そのためには、〈自己家畜化〉論を批判する視点が必要であろう。つまり、〈自己家畜化〉論には、「言語」の独自性の視点、すなわち、言語的コミュニケーションの持つ独自の人間学的視点が弱い、という批判

である。それは、〈自己家畜化〉の論理から人間関係のあり方を考える上で、決定的な意味を持つ。なぜならば、言語は、感情を表現し、道徳を成立させ、社会秩序を形成する上で、不可欠だからである。その意味で、〈自己家畜化〉論には、人間独自のより高度な共同性の発現形態である「制度」の視点から社会を把握する必要への認識が稀薄であり、そのことが、政治体制（人間の自由を廻る問題）に関する議論への接続の可能性を著しく低下させているのである。したがって、この批判への応答を抜きにして、人間関係のあり方についての十分な考察は言うまでもなく、総合人間学としての〈自己家畜化〉論のさらなる展開も不可能であるように思われる。それ故、本小論では、小原秀雄氏への敬意をこめて、敢えて、〈自己家畜化〉論を批判する試みを展開しようと思う。

1 〈自己家畜化〉論における言語の位置づけを廻って

(1) 「道具」としての言語

動物学者小原秀雄氏の〈自己家畜化〉論は、人間の進化の特殊性を把握する優れた議論である。その最大の特徴の一つは、道具とその派生物（「モノ」）を人間進化の主要な淘汰圧として位置づけ、そこから、人間進化における「ヒト化」とは区別される「人間化」の過程を導いたことである。すなわち、それは、自然的存在であり、かつ、社会的存在でもある「人間（ヒト）」という表記に象徴されるように、その複層的な存在様式を示すことで、進化における人間と生物との連続性と不連続性を見ごとに接続させた。

一方、こうした人間進化の特殊性を把握する点において、言語への注目もまた、極めて重要な視点で

ある。なぜならば、仮に、動物にも社会や文化の存在を認めることができたにしても、言語の存在だけは決して動物には認められるものではないからである。だが、それほど重要な人間理解の視点であるにもかかわらず、小原氏の〈自己家畜化〉論における言語への直接的な言及は驚くほど少ない。その要因の一端は、小原氏が言語を道具に還元した仕方で議論を展開している点に認められるが、まずは、小原氏が、〈自己家畜化〉論との関係において、言語をどのように論じているかを見ていこうと思う。

〈自己家畜化〉論を展開した数ある著作の中で、正面を切って言語を論じた個所は、1985年に出版された『人〔ヒト〕に成る』の「第六話 人間化と精神世界の誕生」における「3 言語と精神世界の獲得」においてである。ここで小原氏は、人間にのみ言語が生まれた理由を精神世界の成立と結びつけた議論として展開している。例えば、約6万年前の遺跡として有名なイラクのシャニダール洞窟では、死者の埋葬が行われていた事実が確認されているが、そこに見出される精神世界は、抽象の世界、観念の世界であり、この抽象世界を伝承する特別の「道具」が言語であった、と小原氏は考えている（小原1985：144-145）。これによれば、人間の言語獲得の第一歩は、人間が動物のコミュニケーションのしくみからもう少し進んで、道具を使うようになったときに始まった、とされる。なぜならば、道具は初歩的なものであっても、何らかの目的と結びついており、その意味で、道具のもつ意味には何らかの抽象性、目的性が認められ、ある具体的な状況下で道具のもたらす意味の機能が生まれるからである。例えば、狩りの道具はすぐさま獲物を連想させるが、それは、その道具そのものが、何かを生み出すものを含んでいるという意味で、言語（コミュニケーション

ンの道具) と共通の部分をかなりもっている、と小原氏は指摘する(同: 147)。

また、言語の起源とつながるもう一つの重要な視点として、小原氏は、人間集団における伝達を必要とする個体間の関係についても言及している(同: 149-151)。これは、言語が伝達内容の複雑化による抽象性に対応したものであるとして生じたのみならず、人間集団のサイズが大規模化することによる情報伝達上の必要から生じたとするものであり、そこに、人間のコミュニケーションが単なる情報伝達を超えて、社会的な結びつきになったとする視点を小原氏が見出している点は大変興味深い。(なぜならば、この指摘は、後述するように、言語が道具に決して還元されない側面をもつことの重要性を指摘する本小論の主張に深く関わるものだからである。) それはまた、言語による個体間相互の伝達が、動物の種の視点からすれば、種の個体間の結びつきの構造と対応している種の内部構造である、という指摘であり、かつて今西錦司氏が「種社会」と表現したものである。そこで、小原氏は、人間の社会が、内部にヒトの種社会と言われる構造をもちながら、社会化された自然を存在の場として生み出されたものとし、その視点から、動物の社会がどのようにして人間社会になったのかを改めて問うのである。

(2) 〈自己家畜化〉論は社会をどう視るのか

〈自己家畜化〉論では、社会とは、一方で、道具とその派生物によって改変された生態系(人工生態系)を意味し、他方で、近縁種の類人猿由来の前家族的な集団を単位とし、それにグループハンターとしてのニッチに由来する個体間の共同関係が加わった集団の発展したものであるとして規定される⁽³⁾。これらはいずれも、社会の進化を生態学的視点から解き明

かす点において大変優れた論理展開であると言える。その効力は、例えば、前者の議論では、〈自己家畜化〉論が、いわば「第二の自然」としての社会(人工生態系)を人間と自然との関係性の中に見事に位置付けた点に現れている。

また、後者の議論では、人間社会の起源には、二つの面が見られると小原氏は指摘する。その第一は、動物の群れから人間の家族に至る進化の筋道であり、そして第二は、この家族関係のあり方をも規定する種のあり方である。しかも、そこには、生産関係の起源が含まれている、とする(同: 155)。第一の指摘は、一般に霊長類学者が強調するように、遺伝的な近縁関係の視点におけるサルから人間への進化の連続性の指摘であるが、第二の指摘は、生態学的な視点においてニッチを同じくするリカオンなどの種社会から人間の社会へと引き継がれる集団の基本構造の存在を指摘するものである。重要なのは、その集団構造(種社会)にこそ、今の社会経済体制につながる生産関係の起源があり、そこに動物と人間の不連続性を接続する契機を小原氏が見出していることである。

確かにこの視点は、ヒトの種社会が人間(ヒト)の社会へと発展する筋道を、その契機とともに明示する説明である点において、大変有効である。しかしながら、どんなに近縁であっても、類人猿の前家族的な集団が自然発生的に人間の家族になったわけではないし、どんなにニッチが酷似しようともグループハンターの種社会の状態から人間の社会は生まれようがない。すなわち、そこに横たわる不連続的なものを接続し、動物から人間への飛躍を可能にしたものの存在が問われねばならない。それこそが、言語であろう。言語の出現こそが、動物の前家族的な集団を人間の家族に変え、動物の前社会的な集団

を人間の社会へと変えた主要な一因であろう。

例えば、いわゆるインセスタブー（近親交配の禁止）に相当する現象は、人間以外の動物でも広く確認されている。しかし、人間社会が動物のそれと質的に異なるのは、インセスタブーが社会制度として成立している点であり、それが制度である以上、言語の出現を待たなければならなかった点にある。なぜならば、親族の呼称が成立して初めて、血縁関係における集団の区別が可能になるわけで、この区別の認識こそが制度的なタブーの認識を可能にするからである（今西・吉本 1978：147-148）。

また、ヒトの種社会に既に人間社会の生産関係の起源を認めるのは進化論的な視点からの社会理解において重要ではあるが、逆に、生産関係のみへの過度の注目、かつてのマルクス主義者のような労働一元論的な社会理解への陥穽の危険を冒すことにもつながるだろう。なぜならば、小原氏の説明はもっぱら生態学的視点からの発展形に止まるものであり、ヒトの種社会における生産関係が人間（ヒト）の社会の経済体制に成るということには、そこに制度化のプロセスを認める必要が生じるからである。すなわち、そこには、労働の視点のみならず、制度成立の基盤としての言語的コミュニケーションの視点が要請されるからである。

一般に、制度とは、既存の社会における所与のものとして現象する。ただし、所与とは必ずしも永久不変を意味するものではない。特に、制度が社会的なものである以上、それを変えることは可能である。だからこそそこに、関係する人々の間での合意が要請されるのであり、そのため、言語的コミュニケーションが重要な役割を果たすのである。確かに、言語を道具に還元する小原氏の議論にも、両者の共通項として「何かを生み出すものを含んでいる」こと

が指摘されており、その意味で、道具によるコミュニケーションの可能性は否定されない。しかしながら、それは言語が単なる情報伝達的手段という道具的側面を超えて、「自己表出」という独自の行為

（行為目的）として成立することを意味するわけではない⁴⁾。ここに、言語が道具に還元されない、否、むしろ、還元されてはならない理由の一つがある。

(3) 社会における言葉の力—言語的コミュニケーションの人間学的考察

哲学者の尾関周二氏は、その主著『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』の中で、人間理解における労働の視点の意義を強調しつつも、それには還元されない言語的コミュニケーションの視点独自の意義があることを指摘している。それは、労働という人間活動が、基本的には人間が自然に働きかける「主体—客体」関係であるのに対して、言語的コミュニケーションは、人間同士の相互関係である

「主体—主体」関係を基本とするからである。これは何も、労働における人間と自然の本来の関係性が、人間からの一方的で、身勝手な自然への働きかけである、とするものではない。なぜなら、そのような自然への不遜な態度こそが、今日の環境破壊の元凶を成すものであり、むしろ尾関氏はそれを批判する立場から、人間と自然とのコミュニケーションの可能性を指摘しているからだ。ただ、その場合のコミュニケーションとは、言語的コミュニケーションとは質的に異なるものであり、後者を人間の「より高い共同性を実現する可能性」として位置づける（尾関 2002：61）。これもまた、労働における共同性の可能性を決して否定するものではないが、言語的コミュニケーションの場合、その対象が主体である以上、その活動は相互確証を基本とするもの

であり、自己確証を基本とする労働の場合とは次元が異なるのである。

それは、人間社会における道具とは異なる言語独自の意味次元の成立である。これに関し、哲学者の松永澄夫氏は「言葉の力」を論じる中で、以下のような議論を展開する。例えば、私の両手が荷物でふさがっている時、「扉を開けて」と叫ぶ。すると扉が開き、私は部屋に入ることができる。それが「言葉の力」である。但し、私の言葉が力をもつのは、私の言葉を聞いて行動してくれる人が居るからである。すなわち、言語的コミュニケーションにおいて言葉が力をもつのは、言葉を発する私とその言葉を聞く相手との関係（「主体—主体」関係）において、その限りである。仮に、その扉に音声センサーが取り付けられてあって、「開けて」と言えば、扉が自動で開くようにすることは可能である。しかし、「閉めて」と言って、扉が開くように設定することも可能である。つまり、そこに意味次元の成立は認められないのだ。すなわち、「言葉の力」とは意味の力によるものであり、一端口から発せられた言葉は、もうその時点で力をもってしまふ、そのようなものである。それ故また、言葉を話すことは、或る責任をも負う、その結果を引き受けるということである（松永 2005）。

これに対し、道具は、作って置いてあるだけでは力をもたない。人間がそれを使い、対象に働きかけて初めて力をもつのだ。確かに、小原氏の議論では、初歩的な道具であっても、何らかの目的と結びついており、その意味で、ある具体的な状況下で道具のもたらす意味の機能が生まれることが指摘されていたが、それは「主体—客体」関係を基本とする道具の二次的な効果に過ぎず、「主体—主体」関係を基本とする言語の特性が、決して道具に還元されない

一面をもつことは銘記されなければならない。その理由は、言語が何かを伝えるための手段として利用されるだけでなく、「自己表出」という目的そのものである点にある。それ故、言語的コミュニケーションにおいては、その対象が主体である以上、自らの「自己表出」に対して、対象からどのような「自己表出」がなされるのかが最大の関心事であり、したがって、この人間活動においては、自らの発する言語への深い関心とともに、対象である人間への深い関心が伴うのである。だが、裏を返せばこのことは、偽りの「自己表出」により、対象を欺き、また、対象から欺かれる可能性があることを示している。そこには、岡目八目的な複雑極まりない心理戦の展開が予想されるのだが、人間にそのような能力（言語）が必要となった背景には、それだけ人間の社会に複雑極まりない関係性が生じていたことを示唆するものであると考えられる⁶⁾。すなわち、人間の社会は、間違いなく、ヒトとしての「生態的基礎」の上に成立したものではあるが、単なるその延長としてではなく、より高次な社会として成立しているのであり、その理解の鍵を握る要素の一つが言語なのである⁶⁾。それ故、一方で、人間学的考察における労働と道具の意義を注視しつつも、他方で、言語的コミュニケーションと言語の独自の意義を決して見失ってはならないのである。

2 人間関係のあり方の視座を〈自己家畜化〉論に探る

(1) 「〈個〉であること＝〈種〉であること」—主体性と共同性の「生態的基礎」

繰り返すが、小原氏の〈自己家畜化〉論の最大の特徴の一つは、道具とその派生物（「モノ」）を人間進化の主要な淘汰圧として位置づけ、そこから、人

間進化における「ヒト化」とは区別される「人間化」の過程を導き、自然的存在であり、かつ、社会的存在でもある「人間（ヒト）」という複層的な存在様式を示すことで、進化における人間と生物との連続性と不連続性を見ごとに接続させた点にある。すなわち、「人間（ヒト）」とは、社会的・文化的存在としての人間が生物としてのヒトを内包していることを端的に示したものであり、人間の特質は、生物学的性質が社会的文化的な条件に規定されて具体化し、発現している点にあるとするものである。つまり、生物としてのヒトが、社会的文化的に変容して人間となっているのであり、人間においては社会的文化的法則性も生物的法則性から分離しては存在し得ないところに独自性がある（小原 2000：15）、とするものである。

この人間像に従えば、個人の行動形成は、社会的文化条件のもとに生物学的なヒトとしての形質が成立することであり、それが個として人間が人間になるということである。日常的な食生活や性生活、家庭生活などにおいても、そのすべては基本的には生物学的な行動の型の社会的文化的な支配のもとでの変容であり、単なるヒトという種としてそれを持つのではなくて、それがどんな形にせよ社会的文化的条件のもとに存在様式がつくられるのである（小原 2000：15-17）。したがって、生物学的側面と社会的文化的側面の相互作用がなくなれば、個としての人間もヒトという種も成立し得ないのであり、人間（ヒト）とは、〈個〉であることが〈種〉の特徴をなし、〈種〉であることが〈個〉であることを意味する存在なのである。ここで重要なのは、個体と種社会の関係が各々の特性を相互に規定し合っている点である。すなわち、個体は種社会の一部にしか過ぎないが、その特性を一方的に規定されているわけではな

く、逆に、それが全体である種社会をも特徴づけているのである。

〈自己家畜化〉論から導かれるこうした人間理解は、人間関係のあり方を考える上で、極めて重要なことを示唆しているように思われる。なぜならば、一般に、個人を特徴づける自由な主体性の発揮と社会（共同体）を特徴づける共同性の発揮は、しばしば、相反するものとして語られてきたからだ。例えば、1980年代以降、主に英米圏に現れたコミュニタリアニズム（共同体主義）は、個人に対する共同体の存在論的優位を主張した。それは、個人の権利に基礎を置く現代の自由主義やリバタリアニズム

（自由至上主義）に対する批判であり、これにより、社会原理として個人の自由を重視するリバタリアン（自由至上主義者）と、それに対し、地域の共同を重視するコミュニタリアン（共同体主義者）の主張が真つ向から対立してきた。その主要な論点の一つは、人間にとって自由な主体性の発揮がより重要なのか、それとも、自由を制限する共同性の発揮か、を争うものであったと言える。

しかしながら、〈自己家畜化〉論の示唆する人間の主体性と共同性の関係は、必ずしも二項対立的なものではない。それは一方で、共同性こそが、人間関係のあり方を基礎づけるものであり、人間社会の基盤を成すものであるということだ。また、他方で、〈個〉としての人間の主体性の発揮は、〈種〉としてのヒトの共同性の上に成り立つものであり、この共同性なくしては、人間としての〈個〉も、主体性の発揮もあり得ないとされる、人間関係のあり方の基本構造が進化論的に「生態的基礎」の上に形成されてきた、ということである。すなわち、人間の主体性とは共同性を基盤に持つ「共同的主体性」であり、共同性と無関係に成立するものではないし、共

同性もまた、個々人の主体的参加を基盤として成立する「主体的共同性」であり、主体性を無視して成り立つものではないのである⁷⁾。そして、その基盤が大きく揺らいでいるところに、現代の日本における「絆」強調の背景が見え隠れしているのである。

(2) 現代日本の「絆」の強調を再考する

さて、先の寄稿論文（穴見 2014）でも示した通り、東日本大震災を一つの契機として、家族との絆やつながり、また近所の人たちとの付き合いを大切にしたいという気持ちが多くの人々において以前より強くなった、という事実は明らかである。また、他人の役に立つことを望み、経済的な豊かさよりも心の豊かさを望む声も以前より強くなったようである。災害時のみならず、平時での助け合い精神は日本人の美德であり、あの震災から三年余り経った今でも、しばしば、「絆」の語はマスメディアを賑わせている。無論、そこには、大震災からの復興が長期に及ぶこと、そして今後の継続的な支援を国民に取り付けるためにも大震災の記憶を風化させてはならない、との認識がある。

福島第一原子力発電所の事故の影響もあって、この三年間は国の原発政策を廻って日本が揺れに揺れた時期であったが、依然として、この事故の収束の目途は立たず、汚染水処理の問題も拡大していく中、この問題の風化を避けるためにも、大震災の記憶の風化防止は重要なことであろう。その意味でも、確かに、東日本大震災からの復興は、国民的課題であることは間違いない。ただ、この問題がどれほど大きく、どれほど重要であっても、現代日本の問題はこれに尽きない。例えば、日本は、過去の戦争をめぐる歴史認識の問題で揺れに揺れている。旧日本軍の従軍慰安婦問題、強制連行と強制労働への戦後賠

償の問題、首相の靖国神社参拝の問題、竹島や尖閣諸島をめぐる領有権問題、自衛隊の集団的自衛権行使の問題、そして、憲法改正の問題などである。これら一連の問題群は、第二次世界大戦の反省に立ち、世界で唯一の平和憲法を掲げ再出発した日本のこれまでの平和への努力を無に帰し、再び、国民を戦争の惨禍へと巻き込んでいく危険性を十分に孕むものである。それは、世界の人々にとって、日本が第二次世界大戦以前の状況に後戻りする現象に等しいのである⁸⁾。

このようなきな臭い状況を一方で見据えた場合、他方で、今の日本における復興支援の象徴としての「絆」の強調は、果たして、助け合いの精神等という、日本人の美德としてのみ野放図に称賛されるべきものなのであろうか。否、おそらくそうではあるまい。東日本大震災以降、福島第一原子力発電所の事故の問題もあって、多くの識者が異口同音に、日本は変わらなければならない、と述べた。これに関し、作家の辺見庸氏も、3.11以降この国（日本）の在り様は変わらねばならない、という。ただし、それには、どの様に、という疑問が常に付きまとう必要を辺見氏は強調する。なぜなら、そこには、「なりたちゆかなくなった経済状況ともからめて、3.11以降、しがたない個々人の生活より国家や国防、地域共同体の利益を優先するのが当然という流れが自然にできてきている」ことへの危機意識があるからだ（辺見 2012 : 30）。そして、その中で、「個人」は「国民」へ、「私」は「われわれ」へと、いつの間にか統合され、「変わらなければならない」という言説は、見えない強制力、統制力となって、個を窮屈に、不自由にさせているのである。より重要なのは、それが必ずしも国家やその権力によってではなく、「われわれ」が無意識に「私」を統制してい

るという側面がある点に辺見氏が注目していることである。それを辺見氏は、上からの統制ではなく、「下からの統制と服従」と呼ぶ(同上)。

確かに、大震災直後の日本には異様なほどの自粛ムードがあった。辺見氏も指摘しているように、TVプログラムからは、あまたあるお笑い番組が姿を消し、CMと云えば、まるで国民を洗脳するかのようACジャパン(公共広告機構)からの説教くさいメッセージが反復放映されていた。また、どこからともなく、その年の花見にも自粛を促すような言説が流布し、筆者自身、大変息苦しい思いをしたことが思い返される。「強制されてもいないのに、自由な言説を自己抑制し、課されてもいないのにみずから謹慎してしまう」。それは、「おのずからのハーモニアスなファシズム世界」である、と辺見氏は指摘する。こうした言語管理世界では、外圧よりも内圧が強くなり、「言論を弾圧する許しがたい敵は、鶴のような集合意識を構成しているわたしたちひとりひとりの内面に棲んでいる」、と辺見氏は言う(同:142)。そして、絆とか国難とか、元気、勇気、やさしさなどの安心して複製できる言葉にのみに人々が飛びつく社会は、「言葉が空洞化した社会」であり、われわれは言葉に真に切実な関心をもっていないのではないか、それはまた、人間そのものへの関心の薄らぎを示すものではないか、と問いかける(同:159-160)。

大震災に伴う日本人の(右傾化傾向の)心理機制へのこうした辺見氏の分析は、かつて、ナチス・ドイツにおけるファシズム誕生の原因(「ファシズムの心理」)を探った名著、E.フロムの『自由からの逃走』を想起させる⁹⁾。そこで、フロムは、自由を享受していたワイマール共和国の人々が、その自由由来する孤独を不安に思い、それに耐えかねて逃

げ出す様子を三つの心理機制として描き出した。第一は、権威を内面化することにより、それと同一化すること。第二は、不安の原因を破壊することによって、安心を得ること。第三は、機械的画一性への逃避である。これらは、いずれも自由を抑圧し、自己抑制し、権力に服従する仕方であり、自由という不安から逃避するやり方である(フロム1965)。この見解に倣えば、「絆」の強調は、第一に、その用語を用いた首相をはじめ、各界の著名人の権威を内面化し、第二に、自由の自己規制により不安の原因を破壊し、そして第三に、自己表出を既製品の言葉で済ませる機械的画一性に浸る点で、「自由からの逃走」の現代日本版の一つだという理解も可能である。

(3) 「絆」強調の心理機制—「自由からの逃走」か、「共同的主体性」回復の要求か

自由であることは、民主的な社会の根本原理である。今日、自由でない社会を理想とすることなど思いもよらない。それでも、その自由を自ら廃棄するほどの不安とは、一体何なのであろうか。仮に、自由に由来する孤独という不安の存在を認めるとしても、何故、人はそれに耐えられないのか。フロムによれば、その原因の重要な要素の一つは、「人間は他人となんらかの協同なしには生きることができない」からとする(同:27)。これは、人間関係のあり方の基盤に共同性がある、という本稿の主張にも通ずるものである。そして、孤独を恐れ「帰属」を求める激しい要求のもう一つの要素として、「主観的な自己意識の事実、あるいは自己を自然や他人とはちがった個体として意識する思考能力」を挙げる(同:28)。これもまた、意識的存在である人間独自の関係性のあり方の基盤として、主体性の発揮が重要な意味を持つことを示唆するもので、本稿の主

張に通じている。

だが、これらのことは、裏を返せば、共同性と主体性の発揮が担保された人間関係さえ構築できれば、人々は孤独を感じることはないし、不安を抱くこともなければ、その不安から逃れる必要もないということである。実際、フロムは、孤独の不安から逃れる道が二つあることを示した。その一つは、これまで述べてきたように、「自由や個人的自我の統一性を破壊するような絆によって一種の安定を求める」こと（「自由からの逃走」）。もう一つは、「愛や生産的な仕事の自発性のなかで外界と結ばれる」ことである（同：29）⁽¹⁰⁾。しかしながら、現実には、前者の仕方での社会適応が圧倒的に多く、後者の仕方での対応は少数派である。それは一体どうしてなのか。

この場合注目されるのは、フロムの「社会的性格」の議論である。それは、「集団の大部分の成員の性格構造に共通する面」であり、その意味で、「個人のもっている特性のうちから、あるものを抜き出したもので、一つの集団の大部分の成員がもっている性格構造の本質的な中核であり、その集団に共同の基本的経験と生活様式の結果発達したものである」（同：306）。それ故、「ある一定の社会状態において、人間のエネルギーが一つの生産的な力として、どのように形成され作用するかを理解しようと思う」ならば、社会的性格に注目することが有益だと言える。すなわち、社会的性格とは、「社会過程を理解するための鍵となる概念」なのである（同：306-307）。

フロムは、現代の資本主義社会に広くみられる社会的性格を「市場的構え」と呼ぶ。それは、「人が自己自身を如何にうまく市場へ売り出すか、どうしたら自分のパーソナリティをうまく受けさせること

ができるか、自分は如何にみごとに『包装されて』いるか、自分は『快活』であるか、『健全』であるか、『攻撃的』であるか、『頼もしい』か、『野心的』であるか、更にどのような家族的背景をもち、どのクラブに属し、伝手になる人々をしっているかどうか」等といった点を強調するものである（フロム 1955：90-91）。こうした性格特性は、資本主義経済における労働市場の中で、労働者が自らの労働力を優良な交換価値を持つ商品として売らざるを得ない状況にあることからの必然的帰結ともいえる。そこには当然、激しい競争が生まれる。そして、今日の勝者も、明日の敗者となるだろう。そのような決して気の休まることのない競争社会では、大部分の労働者にとって、「愛や生産的な仕事の自発性のなかで外界と結ばれる」ことは極々稀なことなのである。したがって、多くの人々は、決して満たされることのない共同性に基づく主体性発揮の渴望から孤独の不安が生じ、その不安から逃れたいあまり、「自由からの逃走」へと駆り立てられるのである。

フロムの回答をこのように理解する鍵は、おそらく、人間関係のあり方を規定する人間（ヒト）の「生態的基礎」にあると考えられる。本節第一項で示したように、〈自己家畜化〉論に依拠すれば、人間（ヒト）は「〈個〉であることが〈種〉であり、〈種〉であることが〈個〉である」存在であった。そして、この存在様式が、人間の主体性と共同性の起源ともいえる「生態的基礎」を成しているのである。したがって、繰り返すが、人間の主体性とは共同性を基盤に持つ「共同的主体性」であり、共同性と無関係に成立するものではないし、共同性もまた、個々人の主体的参加を基盤として成立する「主体的共同性」であり、主体性を無視して成り立つものではないのである。そして、〈自己家畜化〉論が示す

このような人間関係のあり方の視座からすれば、今日の「絆」の強調は、むしろ「市場的構え」を要請する物象化された社会への抵抗であり、人間（ヒト）としての本来のあり方を回復するための積極的な自己表出として理解されるのである。

しかしながら、逆を言えば、〈自己家畜化〉の論理から、こうした現代日本における「絆」強調の心理機制への理解が直ちに導かれるわけではない。なぜならば、これまでの論理展開が示しているように、両者の間をフロムの社会心理学の議論が媒介してこそ、その心理機制が初めて理解されるのであり、同時に、人間関係のあり方の視座としての〈自己家畜化〉論の意義も先鋭化されるからである。それは、直接的には、拙稿におけるフロムの議論の重要性を示すものであるが、間接的には、この一連の論理展開を引き出し、可能にする点において、人間学的考察における言語の独自性の視点への注目が重要な役回りを果たしたことを示唆している。なぜならば、本節第二項において、筆者に現代日本における「絆」の強調傾向への再考を促したのは辺見庸氏の議論であり、その問題意識の核心には、人々の「人間への無関心＝言語への無関心」に対する危機意識があったからである。それは、物象化された社会を批判する立場から人間関係のあり方の考察を試みる拙稿の問題意識に通底している。その意味で、言葉の力（言語的コミュニケーション）への注目こそが本小論の議論を可能にするのであり、また、そのことで、社会経済体制の文脈のみならず、政治的な課題（人間の自由を廻る問題）をも視野に入れた人間関係のあり方に関する、より総合的な考察への展開の可能性が開かれるのである。

おわりに—現代日本の「絆」の称揚が教えるもの

これまで見てきたように、現代日本の「社会的性格」と人間社会の「生態的基礎」との間には大きなズレがある。後者は、物象化された人間社会に「共同的主体性」と「主体的共同性」の発揮に裏づけられた人間関係のあり方の回復を絶えず要請し続ける。そのためにも、人間相互の信頼関係の回復は必須の前提となるだろう。しかし、フロムが指摘した「市場的構え」において、他者を信頼することは極めて難しいことである。なぜなら、現代日本では、自分自身が他人からどのように見られ、評価されるか、が問題関心の中心にあり、人々は疑心暗鬼の陥穽にあるからである。それは一見、人々の他人への関心が強いようにも思えるが、しかし、それは、自己への関心の媒介項という手段としてでしかなく、そこでの他人は関心の目的には成りえていない。すなわち、そこでは、自己への異常なほどの関心の高まりに反して、他人への関心は希薄化しており、他人がどのような人格であるかについては無関心なのだ。

これは、辺見氏が指摘する「人間への無関心」の現象の一つであり、同時に、人々が多様な人格に応じた他人を表現する言葉を失うという「言語への無関心」の一つの表れとして理解される。このような心理機制が働く状況では、己の全人格をかけて、率直な自己表出を行うことは、二重の意味において困難である。一つは、他人からの評価を恐れて。もう一つは、自分自身を表現する言葉を持ち合わせずに。したがって、こうした困難を乗り越え、自己表出の欲望を果たすためには、人々は、耳触りがよく、当たり障りのない、それでいて自らを代弁する既製品の言葉を、その語に潜むかもしれない暴力性に気づかずに、好んで用いることになるだろう。今日の日本での「絆」の称揚は、こうした背景を多分に持つ

可能性がある。

そこで、この「絆」の称揚が示しているのは、まずは、それが東日本大震災を契機として高潮した点では反動的なものではあるが、それは単に非合理的として切り捨てられるべきものでなく、むしろ「物象化」された社会への無意識の抵抗運動の側面があり、人間関係のあり方の再考を伴う、ラディカルな社会改革につながる可能性を有する点である。しかし、次に、「絆」の無批判な称揚は「下からの統制」「自己抑制」の心理機制を通じて人々を「自由からの逃走」へと駆り立て、日本の右傾化傾向を強める言葉の力を発揮するという。そして最後に、こうした現代日本の暗部を白日の下に晒す契機となったのが、東日本大震災であった、という点である。このような状況を踏まえれば、確かに、日本は変わらなければならない。また、だからこそ、辺見氏が強調したように、「どの様に」という疑問詞が付いて回るのである。

この問いかけに答えるためには、少なくとも、次の二つの視点が要請される。その一つは、人間社会の「生態的基礎」の再認識であり、もう一つは、人間関係のあり方における「言葉の力」への理解である。その意味で、小原秀雄氏の〈自己家畜化〉論の果たすべき役割は大きい。ただし、そこには、決して道具には還元されない、言語の独自性の視点が位置付けられねばならない。

注

(1)「物象化」とは、K.マルクスの用語で、「人格と人格との関係性であるはずの人間関係が、諸物象の関係性として現象する」ことを指す。より具体的には、資本主義市場経済のなかで、自らの労働力を商品として売らざるを得なくなった労働者が、あたかも

も商品として扱われるようになってしまったことを指している。

(2)文芸評論家の柄谷行人は『世界史の構造』(岩波書店、2010年)の「序文」において、近代の社会構成体を把握する上で、ネーション＝ステートと資本主義経済があたかも「ボロメオの環」の様に結合した、「資本＝ネーション＝国家」の視点が不可欠であることを主張する。これに従えば、資本制経済について考えることは同時にネーションやステートを考慮することが要請される。すなわち、「資本への対抗は同時にネーション＝ステートへの対抗でなければならない」のである(柄谷 2010: viii)。また、今年6月に開催された総合人間学会第9回研究大会シンポジウム「成長・競争社会と(居場所)」における北見秀司氏の報告では、資本主義的経済体制がもたらす問題群がその解決において政治の問題と不可分であることが強調された。これらの指摘は、現代日本における「物象化」の問題を注視する拙稿にとって大変示唆的である。

(3)「グループハンター」とは、集団(群れ)で狩りをする動物種のこと。オオカミはその一種であるが、小原氏がよく言及するのは、アフリカのサバンナに生息するリカオンという中型肉食獣である。また、「ニッチ」とは、生態学の用語で、その生物がどこに生息し、何を食べ、他の生物とどのような関係を結んでいるのかを意味する「生態的地位」のこと。

(4)ここで、筆者は、J.L.オースティンの「言語行為論(Speech Act Theory)」を念頭に置いている(坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978年)。

(5)社会における人間関係の複雑化の契機に関し、小原氏がそれを道具の改良に見出している点は興味深い。これは、道具の製作・使用が、「人間(ヒト)」

の行動様式の伝承に組み込まれており、したがって、新しい道具の製作過程やそれが行き渡る過程などは、人間同士が新しい人間関係を結ばない限り不可能である、と小原氏が考えているからである（小原 1985 : 134）。

(6) 「生態的基礎」という用語の使用は、拙稿（穴見 2014）にて参照した木村光伸氏の論考（木村 2013）を意識したものである。

(7) 人間の主体性と共同性を関係付ける議論の展開において、澤佳成氏の著作（澤 2010）は示唆に富むものである。また、同著作は、後述する E. フロムの議論の理解にも、大いに役立った。

(8) 三浦永光氏の著作（三浦 2010）からは、韓国や中国との関係悪化の原因理解とその解決の糸口を得ることができる。

(9) 辺見氏の分析は、「天皇制」という日本の特殊事情にも及んでいる。筆者はその指摘の重要性を認めつつも、議論の煩雑さを避けるため、本小論ではそれを取り上げなかった。ただ、資本主義の社会経済体制に由来する問題を主題化する本小論の文脈からすれば、この問題は、日本の昭和初期における「農本主義」の台頭との連関において非常に興味深いので、近いうちにまた別の機会を得て、改めて論究しようと思う。

(10) 「外界」とは、理想や価値、共同感や帰属感を与える社会的な行動様式を意味するものと考えられる。

参考文献

穴見慎一（2014）「〈自己家畜化〉の論理から人間関係のあり方を問う—物象化と人間の主体性の問題を中心に」総合人間学会編『人間関係の新しい紡ぎ方—3.11を受けとめて（総合人間学 8）』学文

社
今西錦司・吉本隆明（1978）『ダーウィンを超えて—今西進化論講義』朝日出版社
尾関周二（2002）『〔増補改訂版〕言語的コミュニケーションと労働の弁証法—現代社会と人間理解のために』大月書店
小原秀雄（1985）『人〔ヒト〕に成る』大月書店
小原秀雄（2000）『現代ホモ・サピエンスの変貌』朝日新聞社
木村光伸（2013）「人間らしさの生態的基礎—自己家畜化論の再検討のために」総合人間学会編『3.11を総合人間学から考える（総合人間学 7）』学文社
澤佳成（2010）『人間学・環境学からの解剖—人間はひとりで生きてゆけるのか』梓出版社
辺見庸（2012）『瓦礫の中から言葉を—わたしの〈死者〉へ』NHK出版新書
松永澄夫（2005）『言葉の力』東信堂
三浦永光（2010）『戦争と植民地支配を記憶する』明石書店
E. フロム（1955）谷口隆之助・早坂泰次朗訳『人間における自由』東京創元新社
E. フロム（1965）日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社

穴見慎一（立教女学院短期大学非常勤講師）